

第2章

高大連携教育プログラム（中津川プロジェクト）

山 田 孝

今年度も名古屋大学短期集中型高大連携教育プログラム（中津川プロジェクト）を、8月11日（火）から8月13日（木）の2泊3日、東海地区国立大学共同中津川研修センターにおいて実施した。

同プログラムは、名古屋大学教育学部附属学校協議会の企画によるもので、今回で7年目となり、今回も大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センターと共催し、研究センター長・研究員、附属学校教員及び附属高校同窓生を含む名古屋大学教育発達科学研究科の学生1名も参加して、附属中学3年生、高等学校1、2年生の17名を対象に行われた。

中津川プロジェクトは、高大連携教育プログラムとして「よむ・かく・みる・ふれる・ときはなつ」という学習テーマで実施し、高校の授業では体験することができない、大学教員によるロールプレイやグループワークなどの実技を取り入れた講義や実習が行われた。今年度は実験的に中学生の企画への参加を認め、高大連携プログラムの中学生への波及効果についても研究課題とした。

足立守博物館特任教授が担当した「みる」、「ふれる」、「ときはなつ」では、岐阜県南東部の多治見から中津川にかけての断層を観察し、鉱物（岩石）の多様性を学ぶとともに、中津川市鉱物博物館での体験や、博物館から研修センターまでの道のりを歩きながら、五感のすべてを使って付近の自然を観察した。

安井浩樹医学系研究科寄附講座准教授、末松三奈同助教が担当した「みる」、「ふれる」では、「糖尿病について考える」をテーマに、糖尿病患者さんの治療と生活指導についてグループで話し合い、ロールプレイにより患者へのアプローチの仕方についても模擬診療を通して体験することができた。



模擬診療の様子

根本二郎教授・経済学部長による「よむ」、「かく」、「ふれる」では、「需要・供給曲線を通して見る経済 - 東京オリンピック2020の経済効果を考える」をテーマに、1) 需要曲線とは何なのか。2) 需要曲線を描いてみる。3) 供給曲線とは何なのか。4) 経済効果（社会的余剰）を測る。5) 東京オリンピック2020の費用 - どれだけ費用を負担しても良いと考えるか？ 消費者の満足度を測る。6) オリンピックは企業にどれだけの利益をもたらすか？ 計測事例の紹介等の項目について、グループワークを実施し、グループによるプレゼンテーションも行った。



「だまし絵を読み解く」授業風景

この他にも、木俣元一文学部教授・名古屋大学副総長による「みる」、「ふれる」、「ときはなつ」では、「だまし絵を読み解く」をテーマに ①「だまし絵」とはなにか？ ②いろいろな「だまし絵」 ③だまし絵とまちがえてしまうもの〜トリックアート・錯視・アナモルフォーズ〜などの課題にそって実際に作品を鑑賞し、ダリ、マグリット、ヘイスブレヒツ、エッシャーなどの作品を生徒が選んで気づいた点、面白いところ、画家が意図しているところなどについて、グループ討論を行い意見を発表した。

3日間の企画を通じて、普段聞くことのできない大学教員や大学院生の話を聞くことができ、また、教科を超えた学問にも接することができ中・高生にとって学問への意識を深める機会となった。また、今回初めて参加した中学3年生も授業内容を十分に理解し、積極的に高校生の討論に参加することができた。今後の中津川プロジェクトへの中学生への開放の可能性を探ることができた。